

戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載しています！

「注文から1週間で商品が届かなければ、お客さんは言いますよ。どうなってるんだと。発注はしてるんですけどねと言っても、実際には本が入ってきてないわけだから、お客さんにしてみれば、うちが怠けているみたいに思うわけです。困るのは小樽に行ったらあったよと言われることです。大型書店にはベストセラーが積まれてるんです。こっちはがんがん注文を出しても一冊も入ってこないというのにね。大型書店も積んだら積んだ分、売ってくれたらいいんです。でも売れ残る。そして返品する。おいおい、だからそんなに頼んだら駄目なんだよ。こっちはずっと待ってるんだぞ。そう思いながらやってきました」

30年以上、ベストセラーと縁遠い書店を経営してきた塩田さんの嘆き節は続く。

『鬼滅の刃』もなかなか入ってこなかった。直木賞や芥川賞の本もない。『ハリー・ポッター』もこなかった。版を重ねて、ようやく回ってくる。でもね、その頃には下火になってるんですよ。売りどきを逃してる。だから売れない。売れなければ返品するしかない。返品すると、あの店ではベストセラーが売れないってなる。悪循環というか、本屋でありながら本屋の循環の中にも入ってないというかね。腹が立つことがいっぱいありましたよ」嫌な思いも随分した。田舎の書店経営は苦勞が絶えない。そう話す塩田さんに訊いてみる。本屋を辞めちゃおうって思ったことはなかったんですか？

「ないない。それはない。ないですね」

何度も何度も否定する塩田さんである。理由を訊ねる。ひと呼吸の後に、塩田さんは口を開く。

「図書館がなくなったりすれば、もういいかなって思うかもしれませんね。余市にいまある3軒の書店で図書館に本を卸してるんですよ。書店で本を買わなくても、町の人たちが図書館で本を読んでもくれるのであれば、それはそれでよし。本と触れ合う場所があれば、本との出会いがある。そこから、同じ作者の本をもっと読んでみたいとか、この本は面白かったから手元に置いておきたいとか、誰かにプレゼントしたいとか、そういうときに本屋に足を運んでくれればいい。実際、図書館で目にしたんだけどって言って訪れる人は結構

いるんです。お客さんに対して、本屋の役割を果たしたいという気持ちがあるうちは辞めたいとは思わないんじゃないかな」

コンビニで本を買っていた若者が、書店に流れてくることもあるという。そんなときも、本屋の役割なんだと塩田さんは言う。

「コンビニには雑誌がいっぱい置いてあるけれど、売れなくなるとすぐに配本を止めちゃうでしょ。そうすると、いつもコンビニで買っていた人は、あれ、目当ての本がないっぞてことになる。最近の若い人は、そのときに初めて本屋に行こうとなるんじゃないかな。そうやって、毎週だったり毎月だったり、決まった雑誌を買いにくるようになったお客さんもいます」

新聞の書評欄の切り抜きを持参するお客さんもいる。いまも昔も変わらない風景だという。

「でもね、書籍はうちの店には置いてないことが多い。そのまま注文していく人もいます。諦めて帰る人もいます。せっかくだからと、別の本を買って帰る人もいます。そんなときですよ、書評の本よりおもしろい本と出会ってくれたらいいなと。そこに本屋の役割があると思っています」

本屋の役割。塩田さんの言葉が、ずんずんと胸に刺さってくる。自分自身に置き換える。お前の仕事の役割ってなんだ？ 塩田さんに問いかけられているような気持ちになる。塩田さんの話す本屋の役割、それは塩田さんの役割なんだと、僕は思う。

辞めたいと思ったことがないという塩田さんでも、年を取る。ただいま64歳。会社員であれば、定年の年齢だ。果たして、塩田屋の行く末はどうなるのかな。「うちには四代目はいるけど、やらないと思いますよ。勤め人だから、継ぐことはないでしょう。私の頃とは時代も違う。生き方も、書店のあり方も違う。個人書店のほとんどは、いまの代で終わりですよ。町にTSUTAYAさんなりのチェーン店が入ってくれば、それはそれでいい。そうでなければ、本屋がない町になる。それは避けたい。いま、北海道の市町村の半分くらいは、そんな感じじゃないですか。北後志で本屋があるのは余市だけです。周辺も、長万部にも黒松内にも、本屋はない」(続く)

※「余市の人々。」は、余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥（えべたくや）さんが、余市町に関わりのある人物へのインタビューをもとに執筆し、「WEB本の雑誌。」(<https://www.webdoku.jp/column/ebe/>)に掲載されているものを、転載しております。※掲載日 2020.8.31

問合せ 企画政策課 企画グループ ☎21-2117